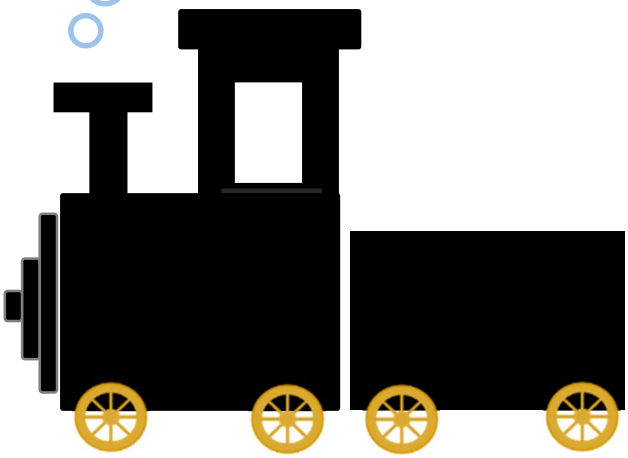
中学生版

BOOK TRAIN

ブック　トレイン

千代田区読書振興センター
学校支援発行
2020 年7月

学校支援担当司書が、
みなさんにおすすめの本を選びました。
のマークは気軽に読める本、
のマークは読みごたえのある本です。



『十四歳日和』

水野 瑠見/著
講談社

中学２年生になり同じクラスになった４人。友情に恋愛に夢に成績にと、悩みを抱えながらも、それぞれ大切なものを見つけて成長していく。うまく結果が出せなかったり、思ってもみなかった結果になったり…。誰にでも起こりうる身近な問題を、中学生の視点から描く青春オムニバス。電子版もあり。

『ケルトの白馬』

ローズマリー・サトクリフ/作
灰島 かり/訳
ほるぷ出版

イケニ族族長の息子ルブリンは、無二の友人ダラと共に、部族の馬と若者たちを率いて遥か北の大草原を目指すことを夢見ていた。しかし、馬と穏やかに暮らすイケニ族の砦に不穏な影が忍びよろうとしていた。イギリスに実在する巨大な地上絵「アフィントンの白馬」はなぜ描かれたのか。その謎とケルト神話を背景に、孤独な少年の成長を描く。

『王への手紙上・下』

トンケ・ドラフト/作
西村 由美/訳
岩波書店

16歳のティウリは騎士になるための最後の試練を受けているさなか、見知らぬ老人から重要な手紙を託される。それは国の未来に関わる、一刻を争う任務だった…。ハラハラドキドキの展開に、思わず夢中になってしまい、長い話が苦手な人にもおすすめできる中世の物語。作者の故郷オランダでは、過去５０年間に出版された子どもの本の１位に選ばれたことがある。

紹介している本はすべて千代田図書館にあります。

『蝶の羽ばたき、その先へ』

森埜 こみち/作
小峰書店

突発性難聴で左耳が聞こえなくなった結。片耳が聞こえないとはどういうことなのか。当事者になって初めて知ったのは、音があふれる日常の中で、話を聞き取ることの難しさだった。親友にも言い出せず、戸惑いと不安の日々を送る中、手話サークルで出会った今日子さんとの交流が、結に新しい一歩を踏み出す勇気を与えていく。

『おいで、アラスカ！』

アンナ・ウォルツ/作
野坂 悦子/訳
フレーベル館

13歳の少年スフェンは、自分が病気である事を受け入れられず、いら立つ日々を過ごしていた。一方、同じクラスの少女パーケルは、4か月前に手放した犬のアラスカと、その後に起きたある事件を忘れられずにいた。“次の瞬間、起こるかもしれない何か”に対して不安を抱える二人が、アラスカを通して前に進もうとする、それぞれの視点で語られる物語。

『鬼のうで』

赤羽 末吉/文と絵
偕成社

源頼光は、丹波の大江山に住む酒呑童子という悪い鬼を退治したが、その時に一緒にいた鬼を一匹逃がしてしまった。そこで頼光の家来、渡辺綱がこの鬼を追って、うでを切り落とした。そのうでを奪い合う、鬼と綱との戦いが迫力満点に描かれている。「御伽草子」「太平記」に出てくる羅生門の鬼退治の話で、能や歌舞伎でも演じられている。

『俳句を楽しむ』

佐藤 郁良/著
岩波書店

最近、若い人の中に俳句を楽しむ人が増えてきた。愛媛県松山市で毎夏開催される「俳句甲子園」をきっかけに、俳句の世界に足を踏み入れた著者がその魅力を伝える。鑑賞の仕方や季語のこと、実際に俳句を詠み、句会を楽しむ所まで、丁寧に解説されている。何気ない日常が俳句によって、豊かに生まれ変わる感動をぜひ味わってほしい。

「BOOK TRAIN」のバックナンバーは、千代田区立図書館のホームページで公開しています。